

ふるさとファイル

製茶の流行

展示コーナーだより
第76号
令和元年6月
生涯学習課

展示期間 令和元年6月4日(火)
~9月1日(日)

図書館休館日および7月2日~14日のパ
ネル展「地域と戦争 2019」期間中を除く

長岡京市の名産といえば、まず一番に皆さんが思い浮かべるものは^{たけのこ}筍ではないでしょうか。乙訓地域では、幕末から筍栽培が盛況でしたが、明治の一時期、様々な理由で衰退し、かわって製茶が明治4年(1871)頃から明治20年代にかけて盛んになりました。今回は、かつてこの地域で行われた製茶に関する資料を紹介します。

乙訓の製茶

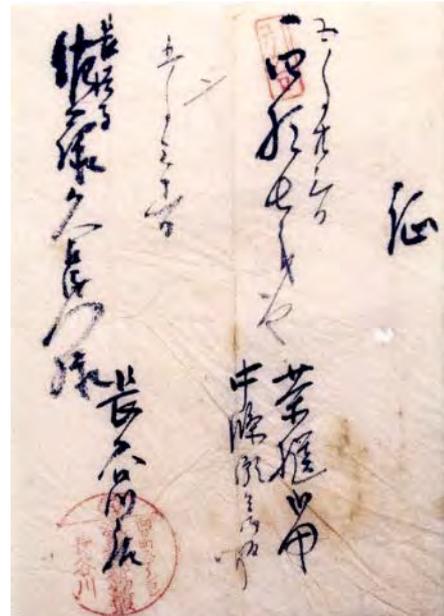
幕末の開港以降、^{きいと}生糸と並ぶ輸出品となった「茶」は、明治になると乙訓地域でも生産が急速に広がります。明治4年(1871)頃より市内の川沿いや丘陵地が茶畑として開墾され、^{たけのこ}筍生産の衰退にともなって^{やぶ}筍が茶畑に転化されるようになりました。明治14年(1881)頃からのコレラ流行の際に筍が「不消化物」とされて需要が減って以降は、今里村では製茶が米に次いで盛んとなり、農作物生産額の17.3%を占めていた時期もありました。

乙訓地域では主に「宇治風」*の^{せんちや}煎茶が生産され、明治10年代後半になると、この地域で生産された茶は、神戸港を経てアメリカ・ニューヨークにも輸出されています。

種類	明治7年		明治8年	
	生産高	売上金	生産高	売上金
米	475石	2310円 50銭	470石	2187円
麦	55石	137円 50銭	50石	125円
大豆	5斗	3円	6斗	3円 30銭
空豆	8石	28円	9石	27円
大根	50駄	20円	30駄	9円
実綿	60貫	27円	50貫	20円
菜種	40石	182円	30石	150円
竹	5400束	216円	160駄	118円
鶏	20羽	6円	15羽	4円 50銭
鶏卵	300玉	2円 10銭	200玉	2円
竹皮	150貫	12円	200目	12円
竹の子	550貫	16円 50銭	650貫	13円
上茶	15貫	30円	25貫	45円
腹	150把	6円	—	—
牡牛	5頭	100円	6頭	95円

「古市村物産一覧表」(「古市村物産取調書扣」個人蔵)

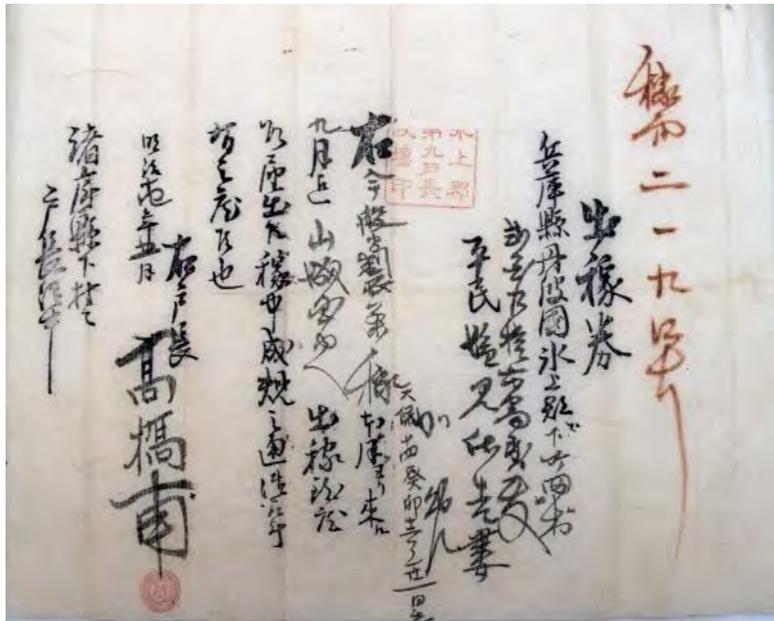
古市村では、茶の生産量が明治7年度に15貫(約56kg)、翌年度には25貫(約94kg)と、筍の生産量を大きく下回るものの、売上金は筍の2~3倍以上にのぼっています。



「証(茶櫃送料領収)」年未詳、個人蔵

長法寺村で生産された茶は、この券に見える向日町駅や、または山崎駅から鉄道で神戸港等へ運ばれました。

*宇治風…^{ひいろ}新芽・新しい葉のみを焙爐上で手もみして乾燥させることで青色を保ち、甘味・香りのある煎茶を生産する方法



でかせぎけん
「出稼券」

明治14年(1881)、個人蔵

出稼ぎ者の身分証明書。製茶のため、丹波国氷上郡下竹田村(兵庫県丹波市市島町)の女性が山城国内へ5月から9月まで出稼ぎを行う、とあります。



ほいる
「焙爐での乾操作業」

明治6年(1873)刊行『製茶新説 前編』

※国立国会図書館デジタルコレクションより

「乙訓郡茶業組合」の結成

京都市内の茶商が「ヨメナ(キク科の多年草)」で偽茶を製造するなど、粗悪茶の横行が原因で茶の販売の勢いがやや低落するなか、明治17年(1884)、乙訓郡の製茶業者たちが「乙訓郡茶業組合」を結成しました。

組合の規約では、郡内の茶園主・製造者・販売者が組合に加盟し、製造は「宇治風」に限ることや、一人当たりの一日の製造量・貯蔵用器が定められています。また、長法寺村では宇治から茶仕事のできる人を迎え入れるなど、質の高い茶のみが作られるよう工夫され、品質の維持が図られていました。

茶製稼人賃金表	
焙爐 二番師	下中上等 金廿廿
焙爐 一番師	下中上等 金廿八
茶摘 壹貫目三付	下中上等 金三十二
同日雇 壹人二付	下中上等 金十四
茶撰 壹貫目三付	金六

焙爐師及茶摘人事故多半途より退出者定額之半金多給
 茶製中焙爐師摘児等へ握飯或へ他ノ品物等
 一切出スヘカラス
 右之通組合會議ニ於テ相定候事
 明治三十一年五月
 乙訓郡茶業組合 事務所 印

「茶製稼人賃金表」
明治31年(1898)、個人蔵

製茶のため雇われた人々の賃金は、乙訓郡茶業組合会議において作業内容別に定められました。このほかにも「茶製中、焙爐師・摘児等へ握飯、或いは他の品物等、一切出すべからず」といった、雇う側の心得も定められています。